

オオツノヒツジにおける無保定採血馴致について

佐藤 真白

金沢動物園では毎年、オオツノヒツジ (*Ovis canadensis*) の繁殖を実施している。妊娠判定や妊娠期の健康状態確認のため、妊娠個体は他個体に比べ採血頻度が増える。妊娠個体の採血に伴う保定は流産や死産に繋がるリスクがあるため、採血時の保定リスクの軽減を目的に 2017 年から獣医師と担当者の 2 人体制による無保定下での採血馴致を開始した。しかし、獣医師との馴致時間の確保が難しい点やペアリングの際に生活環境が変わることや妊娠期の精神状態の乱れから面識の少ない人への警戒心が高まり、集中力散漫で採血が難しい状態となったため担当者のみでの採血馴致に切り替えた。

まず、初めに強化子の選定を行った。オオツノヒツジは固形飼料(草食動物用 ZC : ((株) オリエンタル酵母、以下 ZC) への嗜好性がかなり高く、強化子として有効かと考えたが、採食スピードがかなり速い印象があったため時間がかかりそうなヘイキューブと検証した。手順として、トレーニングをしていない状態でそれぞれ 100 g ずつの採食時間を計測。次に、実際に馴致下での忌避行動の有無を調査した。結果、ZC の方は採食時間が短く、ヘイキューブの方が ZC に比べ、2 分ほど長く採食に時間がかかった。ZC の採食時間はヘイキューブに比べ短かったが、採血馴致を行う上で差し支えない程度であった。忌避行動の有無の調査では、ZC はほとんど忌避行動が発現しなかった。しかし、ヘイキューブは忌避行動が多発した。この要因として、ヘイキューブは口内に含む時間が長いことが忌避行動を誘発していると考えられた。以上のことからオオツノヒツジの強化子には、ZC が最も有効だと考えられた。

次に、実際に無保定下での採血が可能か調査を行った。調査期間は 2025 年 7 月～8 月の 1 ヶ月間。馴致間隔は出勤日で且つ馴致時間が確保できる日は毎日行った (20 回)。対象個体は今後、妊娠優先度の高いメス 3 頭を選出した。今回発現した忌避行動は、首ふり・後ずさり・離脱の 3 つであった。これらの忌避行動が馴致中に発現したら、個体が再び定位位置に戻ってきてから馴致を再開とした。結果、3 頭ともほとんど忌避行動が発現せず、無保定での採血に成功した。また、考察として、忌避行動がほとんど発現しなかったことからオオツノヒツジへの負担も少ないと推測された。また、担当者のみで行うため日程の都合がつけやすい点もメリットだと考えられた。しかし、担当者が変わった際の実施が困難になることが課題としてあげられました。

今後は、精神状態が不安定になりやすいペアリング期や妊娠期での採血馴致の実施、担当者変更に際した対策、馴致者の作業負担軽減のための馴致頻度の模索などの検証の余地があると考えている。